様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２７１０

研究課題名（和文）創発的な価値生成プロセスを促進する演奏表現指導力に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Teachers' Ability to Facilitate Emergent Value Generation Processes in Teaching Performance Expression

研究代表者
菅　裕（Suga, Hiroshi）

宮崎大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：３０２７２０９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：主な成果は次の3点である。
1. 音楽レッスン指導場面において，教員と学生は，他者の身体的リアリティの変化を理解する相互身体的判断を通して協働で音楽表現を生成している 2. 音楽授業における児童・生徒の対話においては「正しい」演奏や教師の設定したルールに自分が従えているかどうかについて考えることが中心となり，演奏表現の質的な変容についての評価やそれに基づく修正活動が行われていない 3.社会的共有調整型とグループ目標指向指示的調整型のグループ内の対話では，内面で生起したイメージをメタ認知的に評価したモニタリング発言が複数生起しており，それが次の課題提起や音楽的提案，作業方略につながっている

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで経験と勘に頼っていた音楽表現学習において指導者と学習者，あるいは学習者同士の創発的な対話，特に身体性や内面で生起したイメージの交換が明らかとなったことから，レッスンや小・中学校音楽授業における表現指導場面において指導者が傾注すべき視点が明確になった。またこのことから音楽科教員養成カリキュラムにおいて，学習者の集団的な学習調整を支援する能力の開発に注力すべきことを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The main results are the following three.
1. In music class, a teacher and a student collaborate in generating musical expression through mutual bodily judgments to understand the changes in the physical reality of others. 2. in music class dialogue among students, their focus was on "correct" performance and whether they followed the rules set by the teacher, and there was no evaluation of the qualitative transformation of their performance expression or modification based on it.3. In the group dialogues identified as socially shared coordination and group goal-oriented directive coordination, multiple monitoring statements were generated based on the metacognitive evaluation of internally generated images,, which led to following issues, musical suggestions, and work strategies.

研究分野：音楽科教育

キーワード：音楽科教育　音楽表現　メタ認知　自己調整

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

演奏表現は，演奏の質を決定する最も重要な要素であると一般的にみなされているにもかかわらず，その指導方法についての研究は少ない。実際，養成段階でピアノや声楽の専門的学習を積み上げてきた初任教師が，音楽の授業や部活動において演奏表現指導に困難を感じている実態がある。これまでの研究により，経験年数が比較的短い指導者を特徴付ける指導の要素は「正確な演奏の追求」であること，これに対し熟練指導者は，自発的・積極的表現姿勢を引き出すことを重視していること，メタファーを含む間接的な指示によって演奏者の主体的な演奏表現変化を引き出そうとしていることが明らかとなった。これらの結果は，熟達した演奏表現指導の特徴は，明確な目標に向かって効率よく学習者を制御していく技術的な熟練性にあるのではなく，不確実・不安定・文脈依存的な場面において状況と対話しながら意思決定を行う実践的熟達者として思考様式にあることを示唆している。実践的熟達者による即興的な教授過程として音楽表現指導を捉え直すことによって，従来の研究とは異なる視点から優れた音楽表現指導を特徴づける要因を発見し，音楽科教員養成への示唆が得られるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は，次の二つである。

(１) 器楽合奏・合唱・個人レッスンの中で展開される熟練指導者と演奏者の創発的思考過程の解明
(２) 歌唱・器楽・創作を含む音楽授業場面における教師と生徒の創発的思考過程の解明
(３) 音楽表現生成場面における生徒の創発的思考過程の解明

３．研究の方法

(１) 熟練指導者と演奏者の創発的思考過程の分析

大学音楽科教員２名（ピアノ，声楽）によるレッスンをビデオ撮影し、レッスン中の教員の思考プロセスや指導による学生の演奏の変容について、自身のレッスンの VTR を視聴させながらインタビューを行った。また、レッスンを受けた各１名に対しても，教師の指示に応じてどのように音楽表現を修正したかについてインタビューを行った。VTR とインタビュー記録のスクリプトを内容に基づいて切片化し、修正型グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の手法を用いてボトムアップで分類し，概念図を作成した。

(２) 音楽授業場面における教師と生徒の創発的思考過程の分析

宮崎大学附属小学校における旋律づくりを課題とする授業の様子を VTR に撮影するとともに授業中のグループ学習における児童の対話をボイスレコーダーで録音した。授業中の教師と児童の発話について Whitebreadetal.(2009)の Coding Scheme にもとづきコーディングを行い，メタ認知的思考に関わる発話の出現頻度とその内容について分析した。

(３) 音楽表現生成場面における生徒の創発的思考過程の分析

音楽教育分野における自己調整学習とメタ認知に関する近年の研究成果について，海外の文献を中心に整理した。また中学校第１学年を対象とする一連の授業の中に，共調整場面として生徒同士で相互評価する活動を挿入し，旋律表現に関する互いの発想や，相手の作品をよりよいものにするためのアドバイスの交換を行わせるとともに，その直後にそのアドバイスをもとに自身の作品を修正させる機会を設けた。その際の生徒のワークシートの記述や対話の内容についてテキストマイニングソフト KHCorder によって分析した。さらに箏による中学生の創作授業に焦点を当て，グループ活動において，生徒同士がアイデアを出し合いながら箏の合奏による音楽表現を創り上げていくプロセスを分析した。

４．研究成果

(１) 熟練指導者と演奏者の創発的思考過程の分析

教員と学生は，からだメタ認知（諏訪,2015）に基づく身体動作や自己受容感覚の言語化と，「有効性を希求する際の振る舞いにおいて等しい身体」の共有を前提として，他者の「身体的リアリティ」の変化を理解する「相互身体的判断」（倉島,2007）を通して協働で音楽表現を生成していることが明らかとなった。この結果に基づき，音楽科教員養成において教師を目指す学生たちに対し，レッスン等を通じて生じる自身の行為と知覚の変化を継続的に言語化させることを通して，からだメタ認知能力を高めていく必要があることを提言した。また音楽授業における調査では，中学校第３学年を対象に行われた歌唱表現の工夫を題材とする授業を観察するとともに，授業内で行われたグループ学習場面の生徒の対話を録音した。発話内容について表現の工夫とその根拠を視点にしてオープンコーディングを行い，類似するコードを集約することによりカテゴリー生成を行った。その結果，生徒の関心は歌詞の言語的な意味や旋律の上がり下がりなどの自分の外側に措定されている事実に向けられており，そこから合理的に導かれる「正しい」歌い方に自分が従えているかどうかについて考えることのみが主題化されていることが明らかとなった。

(２)音楽授業場面における教師と生徒の創発的思考過程の分析

宮崎大学附属小学校における旋律づくりを課題とする授業の様子を VTR に撮影するとともに授業中のグループ学習における児童の対話をボイスレコーダーで録音した。授業中の教師と児童の発話について Whitebreadetal.(2009)の CodingScheme にもとづきコーディングを行い，メタ認知的思考に関わる発話の出現頻度とその内容について分析した。その結果，教師は，旋律の特徴と表現したいイメージとの関係についての〈モニタリング〉に基づく自己調整的な学習を促そうとしていた。これに対しグループ学習中の児童の思考は，ルールの遵守と作った旋律を演奏する際の演奏の出来栄えに向けられており，教師の意図にも関わらず，作った旋律の特徴と実際の響きの質を関連付けながら省察し，自分たちの表現したいイメージへの接近を図る創造的な学習には至っていないことが明らかとなった。「知識を相互に関連付けてより深く理解したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程」が重視される中，このことは，音楽の授業の改善を目指していく中で解決していくべき非常に大きな問題であるといえる。この結果に基づき，次の３つの提言を行った。１．課題の手順を明確に示すだけではなく，その際に使用すべきメタ認知的方略のモデルを提示する。２．メタ認知的方略の重要性と意義について確認する場面を授業の中に設ける。３．学習者に対してメタ認知的思考過程の意識的な言語化を行わせる。

(３)音楽表現生成場面における生徒の創発的思考過程の分析

音楽教育分野における自己調整学習とメタ認知に関する近年の研究成果について，海外の文献を中心に整理した。音楽学習における自己調整・メタ認知に関するこれまでの研究によって明らかにされてきたことは，主に次の５点に集約できる。

①熟練した音楽家は，優れたメタ認知によって適切な学習方略を選択し，学習効果を最大化している。

②初期段階音楽学習者の学習方法は非効率的であり，このため難しい練習を継続するための耐性が弱く，挫折する可能性が高い。

③学習者の自己調整やメタ認知に基づく学習方略の向上を意識した指導により，学習者は効果的な学習習慣を形成し，パフォーマンスを大幅に向上させる可能性がある。

④１対１を基本とするレッスンスタイルの音楽学習は，学習者の創造的な思考を妨げ，音楽家あるいは学習者としての自立性の発達を阻害する恐れがある。

⑤集団的な学習場面における学び合いによって，学習者の社会的メタ認知能力が高まり，自己調整･共調整･社会的共有調整の相互作用の結果，学習者と学習集団の相補的な発達が期待できる。

この結果に基づき，わが国の音楽科教育への適用に向けた課題として，1. 一般的な音楽授業のように様々なバックグラウンドを持つ学習者が協働で学習を行う場面をフィールドとする研究が必要であること，2.演奏中の身体的な自己受容感覚やそれに伴う情動状態に対する演奏者自身の認知等，クロスモーダルな認知の側面を視点に含めることが不可欠であること，3.自己調整やメタ認知のスキルを高めていくための指導方法の効果の検証や，指導者の養成・研修に関する研究が必要であることを提言した。

共調整場面として生徒同士で相互評価する活動を挿入した授業の分析からは，生徒たちが共有知識を活用しながら，作品について批判的に評価し，改善のための具体策を自ら考えたり，あるいは他者に対して提案したりするなど積極的なメタ認知的思考を展開していること，またそのことが自己調整学習にも効果的に作用し，作品の修正につながっていることが明らかとなった。

さらに創作の授業におけるグループ内の対話の分析の結果，生徒たちのグループ活動は，教師によって提示された作品の長さを一分間にまで拡大するという課題に向かって，リズムや旋律の断片を発展させたり，既存の楽曲の旋律を引用するなど，教師が示唆した方略を積極的に採用する一方で，自分たちの演奏の評価については，プラン通り演奏できているか，タイミングのずれなどのミスはないかなどに限定されており，演奏表現の質的な変容についての評価やそれに基づく修正活動が行われておらず，また教師もそのことについての指導を行っていないということが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 菅裕・藤本いく代・阪本幹子・浦雄一・酒井勇也・甲斐真里子・長谷場由久子・竹内美貴・池田由佳里	４．巻 30
２．論文標題 協働的音楽学習活動における生徒の共調整と自己調整の相互作用	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要	６．最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅 裕,藤本 いく代,阪本 幹子,浦 雄一,酒井 勇也,長谷場 由久子,竹内 美貴,甲斐 真里子,植野 真都佳	４．巻 29
２．論文標題 音楽科におけるメタ認知的スキル獲得のための教師の支援	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター	６．最初と最後の頁 39-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiroshi Suga	４．巻 7
２．論文標題 The Emergently Interactive Process of Musical Expression Production between A Music Instructor and A Student	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Creativity in Music Education	６．最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 兼重博美,菅裕	４．巻 42(2)
２．論文標題 音楽科授業における熟練教師の信念と授業中の思考過程との関連性：授業観察とインタビューを通して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本教科教育学会誌	６．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅裕・藤本いく代他	4．巻 28
2．論文標題 歌唱領域におけるメタ認知的スキル獲得のための教師の支援	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要	6．最初と最後の頁 151-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 菅裕・藤本いく代・阪本幹子・浦雄一・酒井勇也・甲斐真里子・長谷場由久子・竹内美貴	4．巻 31
2．論文標題 音楽創作場面における中学生の協働的学習調整	5．発行年 2023年
3．雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要	6．最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 菅裕	4．巻 52(1)
2．論文標題 音楽教育における自己調整およびメタ認知に関する研究動向	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽教育学	6．最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Hiroshi Suga
2．発表標題 A Study of Co-regulation and Socially Shared Regulation Processes in Collaborative Music Learning
3．学会等名 35th World Conference of the International Society for Music Education（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 高見仁志・津田正之・ 齊藤忠彦・ 菅裕
２．発表標題 新時代の学校音楽教育―柔軟性・多様性・創造性
３．学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 菅裕
２．発表標題 音楽教育における自己調整及びメタ認知に関する研究動向　菅裕
３．学会等名 日本音楽教育学会第52回京都大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hiroshi Suga
２．発表標題 The Emergently Interactive Process between a Music Instructor and a Student for Producing Musical Expression
３．学会等名 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 菅裕,高見仁志,津田正之,齊藤忠彦
２．発表標題 共同企画Ⅲ：ラウンドテーブル「新時代の学校音楽教育」
３．学会等名 日本音楽教育学会第50回東京大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関